

地誌作成者としての森幸安

上 杉 和 央

- I. はじめに
 - (1) 問題の所在
 - (2) 使用する史資料
- II. 京都時代
 - (1) 幸安の職業
 - (2) 幸安の御所体験
 - (3) 地理的知識形成の基礎
 - (4) 京都から大坂へ
- III. 『山州撰』に見る幸安
 - (1) 『山州撰』執筆の契機
 - (2) 既存書物との関係
 - (3) 「再撰」の具体相
- IV. 『皇州緒餘撰』に見る幸安
 - (1) 『皇州緒餘撰』の構成
 - (2) 『後撰』の意味
- V. おわりに

I. はじめに

(1) 問題の所在

森幸安(1701-? :以下, 幸安)は, 現存するだけでも400枚近くの自筆図を残しており, 日本地図史上, 稀に見る多作家である。また, 長久保赤水の日本図への影響なども推測されており¹⁾, 地図史ないし地理思想史において看過できない人物の一人となっている。

幸安の名が広く知られるようになったのは, 1920年前後の喜田貞吉による浪速古図

批判においてであり²⁾, そこで幸安は浪速古図の偽作者として名指しされた。この批判は, 佐古慶三によってすぐに反駁された³⁾。しかし, 喜田による偽作者のイメージは, その後の幸安評価にある一定の影響を残し⁴⁾, 1929年に彼の作製した「中古京師内外地図」などが『故実叢書』に採録された後, 彼の作品の一部については研究がなされたものの⁵⁾, 幸安自身の地理思想や作製意図などに踏み込んだ議論は, これまでまったくと言ってよいほど行われてこなかった。

このようななか, 辻垣晃一と森洋久が幸安作製の地図の悉皆調査にもとづいた総体的な検討を行った⁶⁾。辻垣らは多種多様な地図を用いて日本全体を視覚的に表現しようとした彼の『日本志』構想を紹介するとともに, そこに見える彼の地理思想を読みとった。そして, 「地の理」を基準とする形での客観的な描写態度を取り, 「時間・空間・情報」の視点から日本をさまざまなスケールで連続的に表現していった幸安の斬新さを指摘した。この成果によって, 幸安の地図作製やその背景の大枠が初めて明らかとなった。地図史や地理思想史を見据えた幸安研究の土台が提示されたのである。

ただし, 辻垣らの成果にも議論の余地はある。その一番の問題点は, 幸安の活動やその意図がいつの時期も常に一貫したものであったという仮定のもとで議論を展開している点

である。

たとえば、辻垣らは、「地図のオプションとして地誌も作製している」と述べている⁷⁾。しかし、幸安が地図を本格的に作製し始めるのは寛延2年(1749)頃であるのに対し、後述するように、地誌は享保14年(1729)から作成されていたことが資料から判明し、しかも寛延2年以降にはその作成を確認できないのである。このように、地図作製と地誌作成には明確な時期差があり、しかも地誌作成時代が地図作製時代に先行する。この点をふまえるならば、辻垣らの理解については再検討の余地がある。少なくとも、ある時期に幸安は地誌から地図へと表現方法を変えるのであり、そこには幸安自身に何らかの変化があったはずである。一貫した思想のもとで彼が活動していたかどうかは、ひとまず留保し、各時期について個別に吟味していく必要がある。

このような理解のもと、本稿で取り上げるのは地誌作成時代およびそれ以前の幸安についてである。もちろん、地図作製時代の幸安や作品である地図を的確に評価することも重要である⁸⁾。しかし、辻垣らの優れた研究成果を発展的に継承するためにも、また幸安に対するこれまでの「幸安＝カルトグラファー」という一般的な評価⁹⁾ それ自体が、実は50歳を迎える時期以降の幸安の活動だけから判断された評価に過ぎない、という状況をふまえてみても、地図作製時代より前の時期について、資料をもとにした具体的な解明作業が急務であるように思われる。地誌の内容それ自体の理解に加え、幸安の地誌作成の意図やその背景、また地誌作成以前の生活状況などを明らかにしていく作業を通じて、これまでまったく焦点が当てられてこなかった「カルトグラファー」以前の幸安について論じていきたい。地図史・地理思想史における幸安の位置づけを考えるならば、本稿での検討結果は江戸時代、とりわけ18世紀の地

図史・地理思想史を論じる上でも、重要かつ不可欠なものとなるであろう。

(2) 使用する史資料

幸安が地誌を作成していたこと自体は、すでに柴田勲夫や辻垣らが紹介している¹⁰⁾。このうち、現存するものは京都に関する『山州撰』(元文5年(1740)～寛保元年(1741))および『皇州緒餘撰』(寛保3年(1743))、そして大和に関する『大和州地図記』(寛延3年(1750))である。ただし、『大和州地図記』はタイトルからもうかがえるように、本来は地図の紙面上に書かれるべき内容が、別紙に記載されたものに過ぎず、独立した書物として記されたものではない。そのため、『大和州地図記』は、幸安作製の地図の一部として扱うべきである。そこで、今回は京都に関する2つの地誌を取り上げることにする。この二書は、いずれも独自性を備えた優れた地誌書となっている。

『山州撰』は、大阪府立中之島図書館に収められている¹¹⁾。国立公文書館所蔵の地図と比較した結果、幸安の自筆と判断できた。現存しているのは12冊16巻である。そのうち9冊目までが京都に関する内容を備えた「京師撰」であり、残り3冊が山城国郡部に関する「山城撰」である。なお、後述するように、現存するのは『山州撰』の一部に過ぎず、本来はもっと多くの巻があったようである。

『皇州緒餘撰』は、現在5冊が国立国会図書館に所蔵されている。本書が研究に活用されたことは、まったくと言ってよいほどなかった。それは、柴田は自筆本、辻垣らは後世の模写本とするように¹²⁾、史料の性格が不明確であったことに起因していたと考えられる。

今回、改めて原本の筆跡を丹念に調査したところ、表紙や冒頭にある目次部分の筆跡は、国立公文書館蔵の地図群や『山州撰』の筆跡とはまったく異なる一方で、目次以降に記載される本文の筆跡は、明らかに幸安自筆

のものであることが明らかとなった。よって、『皇州緒餘撰』は、表紙と目次を除けば、幸安を理解するための貴重な一次史料である、と位置づけることができる。表紙と目次は、後世の者の手によるものであろう¹³⁾。

II. 京都時代

柴田や辻垣らが明らかにした幸安自身の情報のうち、本稿に必要な点を列記しておく¹⁴⁾。

生年月日：元禄14年(1701)5月19日、京都高辻京極西茶磨屋町に生まれる。なお死亡日時は不明。

名前：幼名は「金吾」。本名は「平八良珍重」。元文2年(1737)に「左球」と改名し、元文4年(1739)に「幸安」と改称。そのほかに「徳軽」や「暉元」とも名乗る。「宇木堂」は庵の名前。

家族：幸安の兄弟は男3人、女1人。男のうち1人は早世、1人は大坂寺町大連寺の住職寂誉徹玄、そしてもう1人は京都京極竹屋町東・東樞木町の「御所ノ菓子司長濱屋」の七右衛門(伯父)の養子となった森村清七である。女は「山城綴喜郡宇田原府作村助三郎」の猶子となり、助三郎の男子と婚姻、二子を産む。菩提寺は茶磨屋町近くの勝円寺。

学統：11～15歳まで同族でもある大森仙安・柳安父子のもとで勉学に励んだ。両者とも医師であり、柳安は「高官の御所」にも参る高名な人物であった。

京都の立出時期：享保15年(1730)に「摂津平野」に拠点を設ける。

特に辻垣らの成果によって、ある程度の理解にまで到達しているが、幸安の職業や転居の理由など、彼の地図作製活動にも関わる点はこれまでまったく不明であった。今回、既存の研究対象からは漏れていた『皇州緒餘撰』を検討することで、いくつかの新しい知見を得ることができた。まず、その点から記

していくことにする。

(1) 幸安の職業

幸安の職業について、柴田は「仏縁に濃い人」¹⁵⁾と、辻垣らは「おそらく「画工」の家だったのではないかと」¹⁶⁾と述べているが、いずれも推測の域を出ていなかった。今回、筆者は『皇州緒餘撰』第4卷所名部「蓮池町」項に幸安の職業が分かる文章を発見した。ここに、原文を書き下して記す¹⁷⁾。

予が曰く、この高辻京極の西を茶磨屋町と号す。南類に旧屋在り。この地は予が出生する所なり。二十年来ここに居る。

後、二条の北、京極の東、叔父の家督を継ぎ、禁裏院中及び公武の香業を勤む。

従来、茶磨屋町での出生から大坂に移るまでの30年間の動向がまったく分かっていなかったのだが、上記の文章にはそれを埋める重要な情報が記されている。幸安は茶磨屋町の生家に「二十年来」居住した後、叔父が経営する香具屋を継ぎ、禁裏や院中、公家、武家に香具を販売していたのである。

この香具屋について、その場所は「二条の北、京極の東」とある。この点について、後年に幸安が記した地図「遷轉新地地図」(寛延4年(1751)作製：国立公文書館蔵)に興味深い記載がある。この図は、相国寺・御所の東部から鴨川にかけての新地を描いたものである。そのなかで、御所の西南付近の東樞木町に「御菓子所長濱屋」と記載されている(図1)。幸安の兄弟の1人が伯父宅である「長濱屋」を継いでいたことは、すでに触れた。それがこの場所である¹⁸⁾。注目したいのは、「長濱屋」の東隣に見える「御香具所村山氏」という表記である。「遷轉新地地図」には、寺社および公武の名称を除けば、商家の名称はこの2軒を除いて記載されていない。

この「村山氏」こそ、幸安の継いだ香具屋である可能性が非常に高い。それは『皇州緒



図1 「遷轉新地地図」内にみえる「御香具所 村山氏」
 原図：「遷轉新地地図」（独立行政法人国立公文書館蔵／177-1-18）

餘撰』内に『村山家記』なる資料が数多く引用されている点からもうかがえる。たとえば『皇州緒餘撰』第3巻「門跡方御里坊」部「知恩院門主御里坊」項には、

村山家記云^{平三郎}、この間、葦ノ下悦宮御里より懸香を仰せ付けらる。有明香更科香を捧ぐ。近衛御殿の御方御所望故に、西御所より方を求め、また捧ぐ。

とあり、『皇州緒餘撰』内に見える村山家は明らかに香具商なのである。また、幸安の作成したもうひとつの京都地誌『山州撰』巻第15四民部土産巻では、京中のさまざまな生産品がその販売店などとともに列記されているが、その「香具」項にも村山の名前が見える。

中立売の香具師日本惣頭播磨守、及び大國屋藤蔵、香具司石見、村山庄右衛門、香具屋七右衛門、香具師十右衛門、同又兵衛、以上の七家を香具師の長となす。禁裏院中堂上の事に預る云々。

この文章からは、「禁裏院中堂上」相手の商いは七家に限られていたことが分かる。そして、本項冒頭の引用によれば、幸安の叔父の香具屋は「禁裏院中及び公武」を相手にした商売をしていた。これらの点を考慮すると、幸安の叔父は村山庄右衛門だと判断してよいであろう。幸安は、京中の香具師のなかでも「香具師の長」という高い地位を占める家を継いだのである。

このような禁裏や公武を相手にした商売を

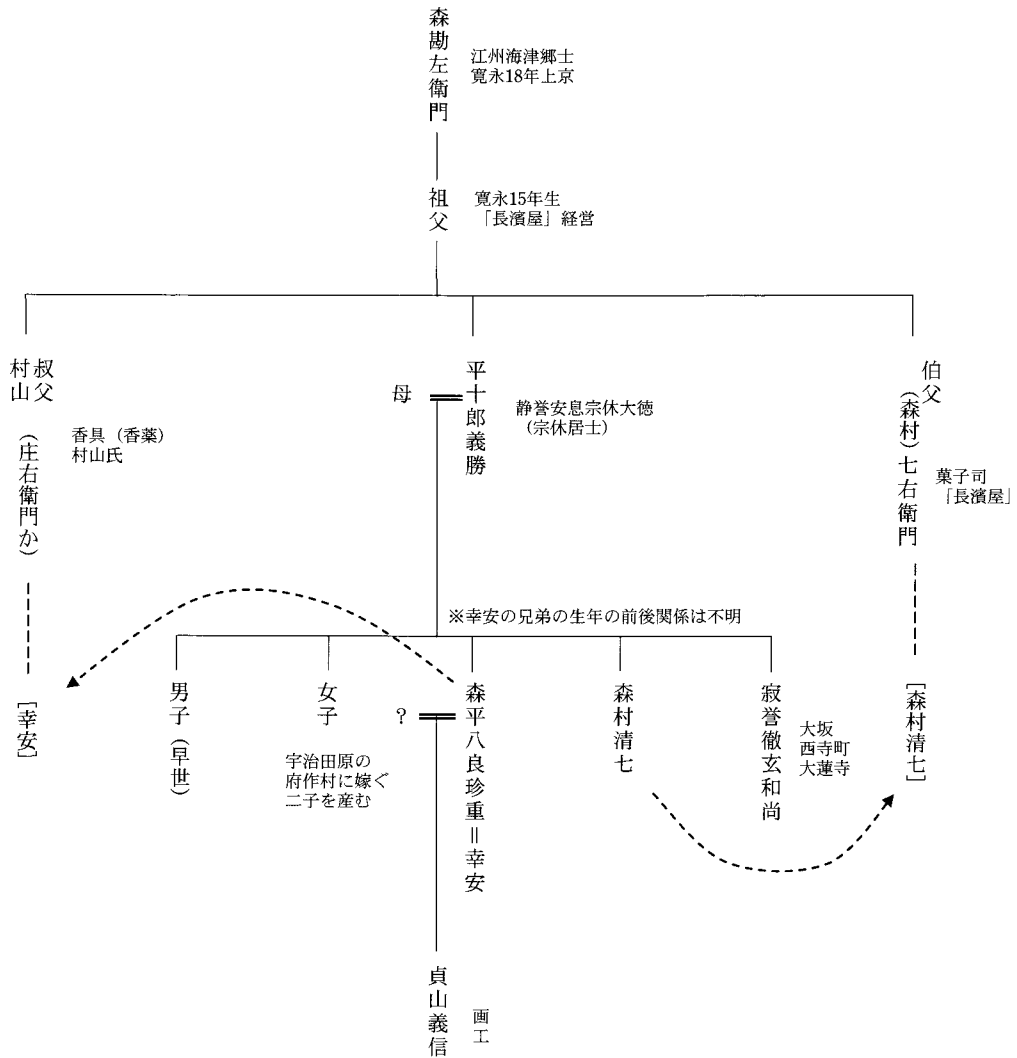


図2 森幸安の家系

直系であることが明確な者のみを掲げた。下記の論考および筆者の検討をもとに作成。
 柴田勅夫「森幸安とその著作図」, 日本地図資料協会編『古地図研究』国際地学協会, 1978, 89~133頁。
 辻垣晃一・森洋久編著『森幸安の描いた地図』国際日本文化研究センター, 2003, 348頁。

している点は、長濱屋も同じであった。長濱屋森村氏と香具所村山氏との関係については、『山州撰』巻第1のなかに幸安の祖父の家が「長濱屋と云う御菓子司これなり」とあるので、長濱屋の方が本家筋であることが分かる。また、辻垣らが指摘しているように、10代前半の幸安に学問を授けた大森父子も同族であり、少なくとも柳安は、公武と接触する高名な医師であった。

先学の業績もふまえ、森幸安の家系を記すと図2のようになるが、幸安が育った環境は、禁裏や公武との接触を持ちうる、一定以上の社会階層のなかであったことが明らかとなった。

(2) 幸安の御所体験

このような環境で育った幸安自身、御所に入出入りしていた。たとえば、『山州撰』巻第

1 「下ノ御所」項に「予も御清所までは参り侍る」と記されており、下ノ御所すなわち仙洞御所の御清所まで入った経験を述べている。さらに、幼少時代には後宮にも出入りをしてきたようである。『皇州緒餘撰』第3巻「二ノ対屋」項の文章を、多少長いが引用したい。

金吾記云 禁中に御局の御殿あり。長橋のつほね、一のたいのや、二のたいのやなどとし侍る。惣して禁中の御内へは御用の町人の外は入る事成かたし。殊におつをねへは前髪の外入る事かなわす。我少年のゆへに御用につみて、常々おつほねに参り侍へる。廣縁、天子様御通のたたみの両方のゑんを、おつほね方装束しておとおり。芝居役者の真似をする十二一重のやうなるびろびろしたるものにはあらず。公家方の御装束の長きやうなるものにて、よく鳴もの也。位高く殊に尊き御すかた也。

先に触れたように、金吾というのは幸安の幼名であり、『金吾記』とは言わば彼の日記ないし備忘録である。この記述から、幸安が幼少時代、「御用」についてい¹⁹⁾、御所内でも特に出入りが厳しく制限されていた後宮に「常々」参るといふ、ある種特権的な経験をしていたことが分かる。広縁を通る「天子様」の横にいる「御局」の装束は芝居役者のそれとは比べものにならず、また公家層のものよりも豪勢であり、「位高く殊に尊き御すかた」であると述べており、「天子様」や「御局」に対する思いを覗かせる。

興味深いことに、この前後の文章は漢文体の文章が楷書で記載される一方、この部分だけは和文体の文章が草書で記されている。「金吾記云…」で始まる他の文章は漢文体で表記されており、文体の使い分けの基準が『金吾記』にあるわけではない。『皇州緒餘撰』第3巻では他に3ヶ所で和文体が使用されている²⁰⁾。上記『金吾記』の内容も含め、

これらの記事では天皇を見た、という主観的な体験（ないしその伝聞）が述べられている。崩御記事や皇居の構造についての記事など、天皇に関する記事はその他にも数多く見受けられるが、客観的な記事はすべて漢文体である。文体を意識的に変えることで、天皇ないし御所という場所に対する非常に個人的な経験や思いを表そうとしていると言えるであろう。

『皇州緒餘撰』第3巻は寛保3年（1743）に書かれている。後宮への出入りは元服以前しか許されないため、『皇州緒餘撰』執筆時と、後宮に出入りしていた時期とは、約30年もの隔りがある。また、京都から大坂に出てきてからもすでに10年以上が経っている。それでもなお、天皇や御所についての近しさと尊敬のまなざしが入り混じった思いが文体を通して表現されたのである。このような特別な感情は、後述する地誌内の御所の記載位置のあり方を理解する上でも、一つの背景として重要となる。

(3) 地理的知識形成の基礎

京都時代の幸安は度々旅行に出かけており、確認できる範囲では山城国嵯峨・嵐山付近、三河国八橋付近、近江国三井寺付近へ赴いている²¹⁾。嵯峨・嵐山付近には何度も赴いていたが、それは幸安の母親が居住していたことによるものである²²⁾。八橋への旅行は「三河国八橋到景図」（宝暦7年（1757）作製：北野天満宮蔵）に記事があり、享保3年（1718）に旅行したことは分かるが、

図するところの三河国八橋の地は、享保三年予この辺を経歴するの時巡視するに、池鯉鮒宿の十餘町北にあり

とあるのみで、その時点で地図を作製したとは一切述べられていない。また、三井寺の旅行についての文言が記された「寺号園城寺一名三井寺図」（宝暦5年（1755）作製：国立公文書館蔵）にも、

予が昔京住の時、この三井寺辺を巡視して今これを顧みて著す

とあり、旅行をした時点で地図を作製していたわけではない。

辻垣らは、幸安の地図作製には「巡視」、すなわち自分の足で各地を巡って地理情報を獲得していく作業が重要であると述べ、上記の旅行も地図作製との関連でとらえている²³⁾。確かに、これらの少年ないし青年期の旅行によって、幸安は空間的な経験範囲を大きく広げ、旅行先の地理的知識を体験的に獲得することができたのであり、このような経験が後年の地図作製にも大きな役割を果たしたことは疑いない。しかし、京都時代においては、旅行と地図作製が直結していた事実は、現時点では確認できない、という点もまた理解しておかねばならない。少なくとも上記の旅行に関しては、地図作製を目的とした旅ではなかった。三井寺といい、八橋といい、これらはいわゆる名所であり、旅行の主目的はあくまでも観光であったと見るべきである。

では、京都時代の幸安は地図を作製しなかったのかと言えば、そうではない。たとえば、「北野天満宮古絵図」（宝暦7年（1757）作製：北野天満宮蔵）には、

おもふに本社八棟造の指図は、予十八歳の時作る鬚。今より四十年を歴てそのあまり五年以前画す。

という文章が見え、享保3年（1718）に北野天満宮本社の指図を作製していたことが分かる²⁴⁾。この点だけから判断するならば、幸安は地図への関心を意外と早い時期から抱いていた、ということになる。

しかし、この時期に描いた地図は、後年の地図作製時代におけるものとは、質的な違いがあった。「山城国地図」（寛延2年（1749）作製：国立公文書館蔵）には、次のような文章が見える。

享保年、都下の本住において京師及び山州の図を作るといへども、世にいう絵図

なり。しこうして、業を退き、学を摂陽に学ぶ。

地図作製時代の幸安が、従来の図を「絵図」と断じ、距離や形が正確な「地図」を目指した点については、すでに辻垣らが明快に論じているところであり再論しないが²⁵⁾、引用部分に見えるように、幸安は自分自身が京都時代に作製した図についても、「絵図」として否定的見解に立ったのである。「業を退き、学を摂陽」で学んだ後の幸安は、精度に欠けるものについては、たとえ昔の自分が描いたものであっても、「地図」として認めようとはしない²⁶⁾。

ただ、どんな形態にせよ、図的表現への関心が京都時代から高かったことは疑いない。そのことは、「官上京師地図」（宝暦2年（1752）作製：国立公文書館蔵）に見える次の文章からも理解される。

この官上図は、享保年間、中井主水正集会所において所見す。

ここから、享保年間に大工頭中井家の集会所に赴いて、京都図を閲覧していたことがうかがえる。ただし、このときは「所見」のみで、模写をした形跡はない。図1を改めて見ると分かるが、中井家の居宅は村山家から目と鼻の先にある。このような地理的環境に加え、幸安の血縁は禁裏院中をはじめ公家層・武家層を相手にした商家であり、中井家自体と取引関係があった可能性もある。幸安が中井家の集会所に行ったのが、享保期のいつ頃であったのか一 村山家を継いだ前なのか後なのか、もしくは大坂移住後なのか一 は不明であるが、居宅の位置関係を考えれば京都時代であった可能性が高いであろう。いずれにしても、自分自身を取り巻く環境を幸安は巧みに利用して中井家の図面を閲覧したと思われる。

このように、京都時代においては、旅行によって地理的な関心を広め、また「世にいう絵図」の類ながら、図的表現も行っていた。

また、中井家に正確な「地図」を閲覧に行くなど、後年の活動に直接的につながるような関心も見せていた。

(4) 京都から大坂へ

20歳頃に叔父である村山氏の家督を継いだ幸安であったが、香具屋生活は10年もたたずに幕を閉じることになる。先に記した『皇州緒餘撰』第4巻所名部「蓮池町」項の後半部を見てみたい。

屢々、病難に罹り、勤を退き、摂陽住吉郡鷹合村及び平野郷に寓居すること五六年、適々断金の友に逢て言語す。頗に大坂住を進すこと一兩年止むことを得ず、難波に住すこと今に至て九年、尤も安逸なり。かたじけなく天恩を感じ、書を書し、当巻を作る。又、この頃、四天王寺茶山の辺にて、良僧に逢う。これまた幸甚ならんや。

この記述を見る限り、幸安は病気を理由に職を退いている。その真偽の程は定かではないが、ともかく30歳前後で隠居生活に入る。ただ、その正確な時期を知るには、この文章が書かれた寛保3年(1743)から遡っていく必要がある。この時点において、すでに「難波」には9年住んでおり、それ以前に鷹合村および平野郷に5～6年住んでいたのであるから、逆算してゆけば、享保14年(1729)前後に大坂に移り住んだことになる。

さらに史料を探すと、いくつかの地図にも享保14年頃の幸安の行動が書き記されていることが明らかとなった。「城南伏見地図」(寛延4年(1751)作製：国立公文書館蔵)には次のような文章が見える。

かつて予、享保十四己酉年より翌庚戌年に至りて伏見毛利橋寓居の時、其の地及び伏見廻りの郷邑山川池塘神廟仏廬古蹟文苑などを歴覧す。これによりて、今時その稿案を校して、この伏見ならびに伏見廻りの地図を著す。

ここから、享保14年から15年にかけて、伏見の毛利橋付近に住んでいたことが理解される。そして、伏見に関する別の地図「呉竹伏見旧地図」(宝暦2年(1752)作製：国立公文書館蔵)から、さらに詳細な期日を知ることができた。

また、享保十四年己酉八月より翌庚戌四月に至り、伏見に遊び、その勝区名蹟などを飽くまで観る。

この結果、享保14年8月より、15年4月までが伏見居住期間であることが明らかとなった。これらの文章を見ると、この時期、伏見でさまざまな景勝地や名所を歴覧しており、伏見周辺の簡単な地図も描いていたようである。「城南伏見地図」はその際の稿案をもとに作製されている。

大坂への移動時期については、『山州撰』巻第7上に「享保十五年戊五月摂州に来て」という文言が見える。また『山州撰』巻第1の巻尾の記述を見ると、享保15年8月の段階で「平野郷野堂町桜井寺」に居住していたことが明らかとなる。先の文章には鷹合村と平野郷の二ヶ所が記されていた。その前後関係は不明であるが、もし居住の順番通りに書かれているならば、鷹合村での居住は享保15年5月から最大で8月までの短期間となる。

Ⅲ. 『山州撰』に見る幸安

(1) 『山州撰』執筆の契機

『山州撰』の各巻には執筆日が記入されており、最終的な校正時期は元文5年(1740)から寛保元年(1741)頃であることが分かる(表1)。ただ、巻第1に

右これ一卷は、享保十五年庚戌八月上旬に、摂州住吉郡平野郷野堂町桜井寺において森謹斎珍重これを撰す。再び元文五年庚申九月下旬、難波大坂津嶋ノ内寓居において珍重これを校す。

とあり、大坂に移動してきた享保15年(1730)にはすでに草稿状のものを執筆して

表1 『山州撰』の執筆時期

冊数	巻数	巻タイトル	サブタイトル	執筆日	備考	
1	2	京師 2	大内裏旧証部上・下	1740年 9月20日	再校(1730年に撰)	
1	1	京師 1	宮城部1~3	1740年 9月26日		
2	3	京師 3	平安城部1~3	1740年 9月29日		
2	4	京師 4	平安城部4~6	1740年10月5日		
10	14上	山城 1	山城州部1	1740年10月11日		校
10	14下	山城 2	通志之部1	1740年10月15日		校
11	15上	山城 3	通志之部2	1740年10月16日		校
11	15上	山城 3	通志之部3	1741年 8月16日		注擇
11	15中	山城 4	通雍之部1~3	1741年 8月21日		注擇
12	16上	山城 5	増補京城勝覽部1~3	1741年 9月 1日		注擇
12	16下	山城 6	南京勝覽部1~2	1741年 9月 8日	注擇	
11	15下	山城 5	通志之部4	1741年 9月 9日	注擇	
11	15下	山城 5	通志之部5	1741年 9月10日	注擇	
11	15下	山城 5	通志之部6	1741年 9月11日	注擇	
3	5	京師 5	洛陽部1~3	1741年 9月14日		
3	6	京師 6	洛陽部4~7	1741年 9月19日		
4	7上	京師 7	洛陽部8~9	1741年 9月25日		
4	7下	京師 8	洛陽部10	1741年 9月29日		
5	8・9	京師 9	洛陽部11~16	1741年10月 5日		
6	10	京師12	洛陽仏刹部2~3	1741年10月14日		
7	11	京師13	洛陽寺院部1~3, 洛陽洛外寺院部	1741年10月20日		
8	12	京師14	堂上部, 堂下部, 四民部1~3	1741年10月26日		
9	13	京師15	四民部4~6, 年中行事部	1741年11月 3日		

『山州撰』内の記述をもとに作成。

いたことがうかがえる。京都時代からではなく、平野郷に住むようになった時点で執筆を開始している点が注目されるが、このことについては、『山州撰』巻第5「高辻通、茶磨屋町」項に関連する記述を見出すことができる。

少年の時、この所に住しこと思ひ出し、何か昔し語りとなりはべる。聞る所を尊び、見る所をいやしむは凡情のならひなれば、京に住し時はなにも思ひはべらず。今難波に久しく住て京へ折々上れども、とどまらず。うらやましさのままに平安の風土の実にかなへる事を知らんため、近年考へて、筆にまかせてこの山州撰を作りはべるものなり。

京都時代、幸安は京都に対する関心がまったくなかった。「聞る所を尊び、見る所をいやしむ」ことが「凡情のならひ」であったた

めである。それが、大坂に居を構えるようになると、京都がうらやましく思われ、「平安の風土の実にかなへる事を知らんため」に『山州撰』を執筆するようになったと述べる。京都から離れる行為が、京都についての関心と呼び起こすひとつの契機として働いていたことが分かる²⁷⁾。

この「聞る所を尊び、見る所をいやしむは凡情のならひ」という表現は、京都の人びとの場所(京都)への一般認識が現れているものとして、非常に興味深い。

水江蓮子や鈴木章生は、江戸時代初期における江戸の名所には、従来の由緒にもとづく名所から現在の繁榮にもとづく名所への変遷が見えることを明らかにした²⁸⁾。また筆者は前者を<過去名所>、後者を<現在名所>と区別した上で、17世紀の大坂では<過去名所>が卓越し、<現在名所>が名所として認

定されていくのは18世紀に入ってからであることを指摘した²⁹⁾。このような見解をふまえつつ、幸安の述べる「凡情」をとらえると、18世紀前半の京都には「聞る所」、すなわち伝承や由来といった伝聞情報—伝聞には時間的要素が必要であり、必然的に情報は過去の状況を示す—を「尊び」、「見る所」、すなわち現在の状況を「いやしむ」といった場所認識に対する風潮があったことが分かる。これは、江戸と京都に関する往来物を比較した石川の「江戸は現実を謳歌し、京都は過去の追慕に浸っている」という指摘とも整合的である³⁰⁾。幸安の記載は、名所のみならず京都の場所全般を視野に入れたものであるため、前稿でとらえたような「名所観」と直結するかどうかは留保が必要であるが、少なくとも京都時代の幸安が過去の状況を非常に重視して場所をとらえていたのは明らかである。

そうであるならば、幸安は大坂に居を移すことで京都という故郷を再発見するとともに、「過去の追慕」に浸る場所認識から脱却して「見る所」を重視する姿勢を獲得した、ということになるのであろうか。おそらくそうではない。後述のように『山州撰』や『皇州緒餘撰』を読む限り、幸安は「過去の場所」と「現在の場所」の両者の記述を試みており、どちらに偏向するといった姿勢は見出せない。従来から持つ京都についての「過去の場所」へのまなざしと同時に、「現在の場所」へのまなざしをも獲得したと言うべきであらう。

(2) 既存書物との関係

現存する『山州撰』は全12冊16巻であるが、たとえば、巻第4「葛野郡」項の、

嵯峨離宮以下旧記、第三十七巻目又三十八巻目、上下の嵯峨の巻に詳なりという記事から、本来はさらに多くの冊数があったことがうかがえる。

このような記事をもとに、欠落している巻号について推定すると、表2ようになる。巻第18～31が愛宕郡、巻第32～40が葛野郡に関する巻であり、これらの巻については「元文5年秋」に校したことが巻第15上に明記されているので、実際に存在したことが分かる。一方、それ以外の郡については、名称は見えるものの具体的な巻号は記載されておらず、また完成したかどうか不明である。少なくとも、寛保元年(1741)の時点では未完成であったと思われる。ただ、『山州撰』作成から本格的な地図作製に入る寛延2年(1749)までには8年間の空白期があり、その時期に作成されたと想定することは可能であらう。

さらに、表3で示したように、一部ではあるが『摂津撰』の具体的な巻号も知られることから、『摂津撰』については記述が進んでいた可能性が高い。また、『皇州緒餘撰』には『大和撰』という言葉も見える³¹⁾。

このように、幸安は現存している以上に、精力的に地誌を作成していたことがうかがえる。次に、それらをどのように作成していたのかについて、検討していきたい。

現存する『山州撰』の記事のなかには、その原文が掲載された書物名が付されているものがある。また、一見すると引用元が分からない記事については、同時代に存在していた地誌や名所記、歴史書などの書物と比較し、可能な限り、その引用元を特定した。その結果、『山州撰』には、特定の書物からの引用が多いことが明らかとなった(表4)。なかでも多くの引用が見られるのは、『日本輿地通志』(享保19年(1734)刊。以下『通志』と略記)、『山州名跡志』(元禄15年(1702)刊。以下『名跡志』)、『山城名勝志』(元禄15年(1702)刊。以下『名勝志』)、『雍州府志』(貞享3年(1686)刊)であり、そのほか特定の巻冊に突出して取り上げられる『京羽二重』(貞享2年(1685)刊)、『京城勝

表2 『山州撰』の現存しない部分の復原

推定巻	名称	具体例	記載巻
17		洛東	京4
18	愛宕郡部	京師ノ北・西鴨・大將軍・西ノ京・「加茂部」葵祭り	京4・城3・城4
19	愛宕郡部・葛野郡洛中ノ部	紫野から柏野にかけての旧証・七社ノ岡・七ノ社・大將軍・西ノ京	京4・城3
20	愛宕郡洛中巻	清蔵口・犬馬場	京7・城3
21	愛宕郡部		城3
22	愛宕郡部	清水領	京4・城3
23	愛宕郡部	祇園領・同新地・知恩院・八坂	京4・城3
24	愛宕郡部	大仏・大仏新地	京4・城3・城5
25	愛宕郡洛東ノ部	河原町・中筋・土手町・熊木町・立本寺跡・真如堂跡・藪ノ下・新烏間・新樺木町・新河原町・高瀬川筋・建仁寺領・同新地・常盤井・塔檣	城3
26	愛宕郡部	二条ノ新家・餘部・粟田口	京4・城3
27	愛宕郡部		城3
28	愛宕郡部		城3
29	愛宕郡部		城3
30	愛宕郡部	北山民の風俗	城1・城3
31	愛宕撰	松ヶ崎辺りの踊り	京15・城3
32	葛野郡洛中巻・長安ノ都ノ部	北野・柏野・内野・西ノ京・町の古跡	京4・京7・京8・城4
33	葛野郡部	梅尾山・鏡石	城3・城4
34	葛野郡部	(寺院)	城4
35	葛野郡部	(寺院)	城4
36	葛野郡部	(寺院)	城4
37	葛野郡部	為家郷ノ塚・「上嵯峨巻」北嵯峨	京8・城2・城4
38	葛野郡部	嵯峨	城4
39	葛野郡部		城4
40	葛野郡部	葛野郡・八条・中堂寺・壬生・東塩小路	城4
※40余巻	宇治郡部		城3
※18巻から50余巻	八郡のこと		城3
※名称のみ	葛野撰		京15
※名称のみ	紀伊撰		京15・城3
※名称のみ	乙訓部		城2
※名称のみ	宇治部	山科	城2・城3
※名称のみ	久世郡部	『宇治巻』宇治	城2
※名称のみ	綴喜郡部		城2
※名称のみ	相楽郡部		城2
※名称のみ	山州撰後集		京4など

『山州撰』より作成。『山州撰』は「京師撰」と「山城撰」からなっており、記載巻の「京」は「京師撰」、「城」は「山城撰」を指している。

表3 『摂津撰』についての推定

推定巻	名称	具体例	記載巻
2	5部	摂州	城2
15	堺部	千利休	京7
?	住吉部	住吉	京15

『山州撰』より作成。『山州撰』は「京師撰」と「山城撰」からなっており、記載巻の「京」は「京師撰」、「城」は「山城撰」を指している。

表4 『山州撰』の記事における既存書物の引用状況

冊数 (巻数)	『通志』	『名跡志』	『名勝志』	『雍州府志』	『京羽二重』	『京城勝覧』	幸安独自	その他
第1冊 (巻第1・2)	27	322	189	0	0	0	98	24
第2冊 (巻第3・4)	191	100	61	5	0	0	84	90
第3冊 (巻第5・6)	13	21	0	3	0	0	471	26
第4冊 (巻第7)	80	106	4	0	0	0	95	23
第5冊 (巻第8・9)	162	213	2	0	0	0	9	6
第6冊 (巻第10)	65	155	0	1	0	0	82	3
第7冊 (巻第11)	7	32	1	36	0	0	97	37
第8冊 (巻第12)	0	0	0	0	144	0	29	47
第9冊 (巻第13)	0	0	0	209	0	0	99	168
第10冊 (巻第14)	105	9	3	3	0	0	45	14
第11冊 (巻第15)	135	1	0	135	0	0	11	0
第12冊 (巻第16)	35	20	3	0	0	230	66	27

※引用書目が不明な部分も「その他」としてカウントした。書物名は本文にあわせて次のように省略している。『日本輿地通志』：『通志』、『山州名跡志』：『名跡志』、『山城名勝志』：『名勝志』

覧』(享保3年(1718)刊)がある。なお、表4中、第9冊(巻第13)の「その他」に関する記事の大部分は「年中行事」に関するものである。節用集を始め、多くの書物が該当するために、一書に特定することができなかったが、実際にはひとつの書物を見て記したと思われる。

多くの巻で引用が見られる四書と『山州撰』との関係については、幸安自身が巻第1の巻頭で説明を加えている。

名勝志 散位正六位上
源朝臣大嶋武好輯編
名跡志 瑜伽林隱士如是相白慧撰
雍州府志 雍州 黒川道祐編
輿地通志 越州 関祖衡纂輯
同 丹州 並河永校
同 摂州 久保重宣校
同 摂州 海北千之校
同 摂州 賀茂保篤校

此書

山州撰 森珍重再撰

このように、幸安は既存地誌の列の末尾に自分の業績を位置づけようとしていた。自分の名前の後に「再撰」と記したのは、既存地

誌の記事を多く引用している点を意識したからかもしれない。

しかし興味深いのは、むしろこの巻第1冒頭部に『京羽二重』や『京城勝覧』が計上されていない点である。これは、『山州撰』を作成ないし再校正し始めた頃の幸安が、上記四書と『京羽二重』などを区別していたことを意味する。

幸安が多く引用した書物のうち、『通志』を除く書物についての系譜関係については、すでに菅井聡子が明らかにしている³²⁾。菅井によると、『京羽二重』は「町鑑+名所記」型、『京城勝覧』は「遊歩コース」型、その他の書は「代表的地誌」型に分類できる。『通志』が大明一統志を模した書であることは、古くから指摘されるところであり³³⁾、この書が厳密な意味で「地誌」であることは疑いない。よって、『通志』も「代表的地誌」にあてはめることが可能であろう。このように、幸安が『山州撰』巻第1の冒頭で掲げた四書とは、「代表的地誌」としてまとめうる書物群なのである。

この巻第1の冒頭部分について、辻垣らは幸安には「明らかに地誌研究者の先学を師と

仰ぐ意識が〔あり〕…その業績を継承して
いこうと〕していたと指摘している³⁴⁾。幸安
は「地誌研究者」の業績を継ごうとしたので
あり、『京城勝覧』を記した貝原益軒のよう
な本草学者を志したのではなかった。その結
果、『名勝志』は『山州撰』内でそれほど引
用されていないにもかかわらず巻第1冒頭に
掲げられる一方で、第8冊の約65%を占め
る『京羽二重』や、第12冊の約60%を占め
る『京城勝覧』などは掲げられなかったのだ
である。

前項で見たような動機から始まった『山州
撰』作成であるが、最終的には「代表的地
誌」を中心とした既存書物を幸安が「再撰」
し、総合的な「地誌」を作成するという目的
にまで昇華されていた、と言える。

なお、第9冊巻第13四民部5の冒頭には、
土産は十一年以前、京兜羅綿二十冊を撰
作せし。八と九の巻に詳に記す。

という文面が見え、幸安が11年前に土産
に関して『京兜羅綿』なる書物を作成してい
たことが分かるが、ここからは、幸安が早い
段階で「代表的地誌」ではない『京羽二重』
について意識していたことがうかがえる。

「兜羅綿」とは、綿糸に兔の毛をまじえて
織った布の意である。『京羽二重』の「羽二
重」もよく知られたように、生地名である。
さらに、『京羽二重』巻一の「南北洛中」・
「東西洛中」項には、まさに「土産」に関す
る記事が掲載されている。このように、タイ
トルと書物の内容からして、『京兜羅綿』が
『京羽二重』を強く意識した上で構想・作成
された書であった可能性が非常に高いのであ
る。

『山州撰』巻第13は寛保元年(1741)の作
成であるので、11年前とは享保15年(1730)
にあたる。先に見たように、享保15年には、
『山州撰』巻第1の草稿も作成していた。つ
まり、享保15年の段階で「代表的地誌」の
系譜を継ごうとした『山州撰』のもと

になる地誌と同時に、「代表的地誌」ではな
い『京羽二重』を意識した『京兜羅綿』をも
作成していたことになる。ここから、「代表
的地誌」と『京羽二重』などとの区別は、享
保15年頃からすでにあったことが明らかと
なる。

また、享保15年は幸安が京都から伏見を
経て鷹合村ないし平野郷へ移り住んだ年でも
ある。この移動は「業を退き、学を撰陽に学
ぶ」と回想されていたが、幸安は大坂への移
住直後に「代表的地誌」とそれ以外の『京羽
二重』という意識をすでに持っていたのであ
る。

(3) 「再撰」の具体相

既存の「代表的地誌」の「再撰」につい
て、たとえば第2冊巻第4を執筆した後、第
3冊巻第5にすぐに取りかかるのではなく、
まず第10冊巻第14の山城に関する記事を執
筆していることが分かる(表1)。巻第4の
後半部では、『通志』に見える洛中内の記述
を集中的に引用しているのだが、巻第14も
また主に『通志』からの引用で成立している
巻となっている。おそらく幸安は、『通志』
からの引用に関する部分をまとめて執筆しよ
うとしたのであろう。

これらを連続する巻号にするのではなく、
記載内容をもとに巻号を巻第4と巻第14に
分けているということは、幸安がこの時期
に、幸安独自の地誌の構想が固まっていたこ
とを示す。その構想にしたがって、「代表的
地誌」を中心とする既存書物は分解され、
「再撰」されているのである。

しかし、『山州撰』は既存書物の記事の単
純な並び替えだけで構成されたわけではな
い。既存書物に見える記事内容を改めたり、
また自らの見解を挿入したりするなど、独自
の視点にもとづく改訂を頻繁に行っている。

一例として、第9冊巻第13四民部4~6を
挙げておく。四民部4・5は、『雍州府志』の

記載にならって農産物から工芸・工業製品の産地や店が記載されている。このような四民部4・5の記述に対して、四民部6では、

この巻は、商家職工の売物のその在る所を記す。見安からんがため、洛陽の町の條通を上置く。

とし、四民部4・5の土産別記載を「條通別」に改訂している。條通別とは、南北と東西の道路名で場所を示す住所表現のことである。

記事内容が條通別に配列された書物は、それ以前にもあった。たとえば『京羽二重』巻1の「南北洛中」・「東西洛中」項がそうである。少なくとも、幸安が『京羽二重』を見ていたことは疑いないので、條通別記載という発想が幸安独自のものでないことは明らかである。しかしながら、項目別に記述されている『雍州府志』を條通別に並び替えるという発想、およびそれを実践した行為そのものなかに、幸安の地理的配置を重視する意識を見出すことが可能であろう。しかも、そのような並び替えは「見安からん」がためであり、項目別配列よりも條通別配列のほうが視覚的に優れていると考えているのである。

また、既存書物の改訂箇所を見ていくと、そのなかには現地へ赴いた経験がなければ加筆が難しい部分が数多く見受けられる。具体例として、『京城勝覧』を用いた洛外散策モデルコースの提示がなされる第12冊巻第16上増補京城勝覧部「聖護院乃森」項（現：左京区聖護院）を挙げておきたい。

『京城勝覧』の引用元となった部分には「百万遍ノ南にあり」とのみ記述されている。一方、『山州撰』では、次のような記述が見える。

百万遍の南にあり。吉田より行道よし。百万遍より加茂川原へ出ても行道あり。すぐに南へ行道あぜ道にてあしく迷道有り。

確かに江戸時代の「吉田絵図」（江戸後期：京都大学文学部日本史教室旧蔵）を見ると、

吉田集落や鴨川沿いにはしっかりとした道が記載されているが、百万遍から南下する道は、途切れがちな小道のみである。もちろん、道の有無に関する情報だけであれば何らかの地図を見れば理解できる。しかし、「あぜ道にてあしく迷道有り」といった具体的な記述は当地に赴いた経験がなければ書けない。

また、第6冊巻第10洛陽仏刹部「壬生寺」項にある、

予、小児の時、この壬生の地藏尊へ毎月廿四日に参詣してこの竹之坊を宿坊として、御供を頂戴す。今は、予、難波津に在り、参詣希なり。

のように、少年時代の体験談も多く取り込まれている。先に触れた京都時代の旅行を含め、個人的経験が幸安の地誌作成（さらには後の地図作製）に一定の貢献をしたことは疑いない³⁵⁾。

『山州撰』は既存の「代表的地誌」の「再撰」という体裁が取られているが、実際は、既存書物から得た間接的な情報と、幸安の直接的な経験やそれにもとづいた知見とが組み合わせられる形で執筆されていったのである。「再撰」の域を超え、高い独自性を誇る地誌書として十分に評価しうる内容を備えているのもそのためである。

IV. 『皇州緒餘撰』に見る幸安

(1) 『皇州緒餘撰』の構成

現存する『山州撰』の執筆期から2年後に、幸安は新たな京都地誌『皇州緒餘撰』を作成している。現在の状態は、後人の手が加えられたものであるが、おそらくその際に、書物の順番が変えられている。本来は第1・2冊が1つにまとめられるべきであり、また第4・5冊も同様になされるべきである。もとは第1・2冊の後に第4・5冊が続いていたと思われる。残る第3冊には『皇州緒餘撰』と銘打たれており、この冊が第3冊目になることはありえないからである。

『皇州緒餘撰』という名前から見ると、『山州撰』と同じく、山城国全体に関する地誌として企図されていたと思われる。しかし、現存する『皇州緒餘撰』には基本的に禁裏院中ならびに平安京城に関する記述しかない。また、第3冊の巻尾には、

寛保三年癸亥八朔吉辰…(中略)…本撰後撰等之下書三冊ノ内也

という文言が見え、寛保3年(1743)8月の時点では「三冊」、すなわち『本撰』としての2冊(現第1・2冊の合冊本と、現第4・5冊の合冊本)と、『後撰』としての1冊(第3冊)が「下書」として作成されていたことが分かる。清書が作成されたのかどうかは不明である。また、現存以上の巻が作成されたのかどうかも、現時点では不明とせざるをえない³⁶⁾。ただし『後撰』は、現時点では1冊しか残されていないにもかかわらず、『皇州緒餘後撰巻ノ一』と巻数が表記されており、続巻を記す意志があったことは疑いない。

『皇州緒餘撰』は『山州撰』作成後の作品であり、その構成については『山州撰』との比較のなかで検討する必要がある。そこで、『皇州緒餘撰』の各冊について、まず『山州撰』の分析と同様、既存書物の引用関係を検討し(表5)³⁷⁾、さらに『山州撰』と記事が重複ないし近似する部分を調査した(表6)。

表4と表5を比較すると、『山州撰』に比べ、『本撰』においては『名勝志』が引用される割合が高いことが分かる。『名勝志』は、基本的に既存の書物の文章を編纂して地

誌としたものであり、その意味で過去の情報が重視された内容となっている。このような内容を備えていたため、幸安は、後述のように過去の京都を記すことを意図した『本撰』で『名勝志』を多く引用したのだと思われる。

ただし『山州撰』の場合、巻第2「旧証部」に限って言えば、『名勝志』の引用が卓越している。すなわち、『本撰』と『山州撰』とを全体として比較すると、『名勝志』の引用には相違が見られるが、同内容が記されている『本撰』第1冊の「大内裏部」と、『山州撰』巻第2「旧証部」とを具体的に見たとき、『名勝志』の引用の多さは類似点となる。

『本撰』第1冊の「大内裏部」と、『山州撰』巻第2「旧証部」に見える相違点としては、引用書物の数を挙げることができる。後者は、ほぼ全てが『名勝志』の引用からなっており、その他の書物からの引用は非常にわずかであった³⁸⁾。それに対し、前者には、『金秘抄』・『拾芥抄』・『延喜式』・『花鳥餘情』・『徒然草』・『年中行事歌合』等からの引用が見え、『本撰』の執筆に当たって、幸安がより広範な史料から過去の京都を考察していたことが分かる。

現存状態からは『本撰』の全体像をとらえることは困難であるが、ここでの比較検討から見れば、『本撰』は『山州撰』の内容をさらに深化させたものであった可能性がある。

(2) 『後撰』の意味

表5を見ると、『本撰』と『後撰』とでは

表5 『皇州緒餘撰』の記事における既存書物の引用状況

現・冊数	元の巻号	『通志』	『名跡志』	『名勝志』	『雍州府志』	『拾芥抄』	『延喜式』	幸安独自	その他
第1冊	本撰 卷之一・上	19	21	111	6	25	6	3	0
第2冊	本撰 卷之一・下	18	3	74	1	6	0	9	1
第3冊	後撰 卷之一・上下	4	2	2	1	0	0	26	226
第4冊	本撰 卷之二・上	15	5	66	2	16	1	14	1
第5冊	本撰 卷之二・下	45	8	67	0	0	0	8	1

※引用書目が不明な部分も「その他」としてカウントした。書物名は本文にあわせて次のように省略している。『日本輿地通志』:『通志』、『山州名跡志』:『名跡志』、『山城名勝志』:『名勝志』

表6 『皇州緒餘撰』の目次と『山州撰』との対応関係

現冊数 (元の巻号)	網目	部	見出し	『山州撰』内記事との対応
第1冊 (本撰 卷之一・上)	平安城・上	城池部 大内裏部	両京城 大内裏 大内裏諸門 大内裏殿舎 八省院 豊楽院 中和院 宮中殿舎 宮城殿舎	— 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷1 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷1 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷2 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3 卷第二・大内裏旧証部上・ 宮城卷3・4
第2冊 (本撰 卷之一・下)	平安城・下	長安城部	長安城京程 長安町小路 長安古蹟	卷第三・平安城部二・西京 長安卷 — —
第4冊 (本撰 卷之二・上)	洛陽之一・上	洛陽城池部上	洛陽程 _# 坊名 所名 _# 大路小路 所名 _# 町名・小名・ 異名	卷第三・平安城部三・東京 洛陽卷 (一部) — —
第5冊 (本撰 卷之二・下)	洛陽之一・下	洛陽城池部下	山川 村里 関梁	— — —
第3冊 (後撰 卷之一・上)	—	洛中部一	皇城 禁裏 禁裏殿宇宮闕 今上皇帝 御所	— — — — —
(後撰 卷之一・下)	—	洛中部二	親王 姫宮 門跡方御里坊 撰家門跡里坊 准門跡 比丘尼御所并御里 坊・姫宮・姫君	— — — — — —

※元の巻号にあわせて配列している

明らかに引用の傾向が異なっている。『後撰』には「代表的地誌」がほとんど引用されず、「その他」にあたる書が圧倒的に多い。具体的な書名を挙げるならば、『職原抄支流』や

『雲上明鑑』、『新增歴代記』、『信長年譜』、『秀吉太閤統記』などである。前二書が取り上げられるのは、本巻の内容が禁裏や門跡についてであることに大きく関係している。

また、非常に特徴的なのは、『村山家記』や『森村家記』、さらには『金吾記』、『徳軽記』、『暉元之記』、『宇木堂日記』といった記録類からの引用である。これらは幸安自身ないし血縁による記録類であり、『後撰』全体の約40%に達する。

『本撰』に数多く引用されていた『名勝志』は、幸安の生後すぐ、元禄15年(1702)に刊行されている。この書は全編が既存書物の引用から構成されており、明らかに幸安が生まれる以前の情報のみが掲載されていた。幸安にとって、『名勝志』に見える京都は、「過去の場所」であり、『名勝志』を「現在の場所」を描写した書としてはとらえられなかった。

一方、『後撰』には、自身や血縁による記録を多用し、非常に身近な内容で構成されている。たとえば、洛中部一の「御所」項には、

宝永五年皇城御増益以来、御所御造営等の所在、これを附す

とあり、宝永5年(1708)の大火後に新たに造営された御所以降のことが述べられている。宝永5年とは、幸安が8歳の時である³⁹⁾。また、「御所」項内の「女御所」では、『暉元之記』として

元文元年丙辰十一月十五日、二條故左大臣吉忠公の御女舎子^聖、御入内有り

とあり、幸安が大坂に出てきた後の元文元年(1736)の出来事が表記されている。さらに、洛中部一「今上皇帝」項では、『雲上明鑑』や『暉元之記』からの引用という形で、享保20年に即位した桜町天皇について、記述されている。そこで示されているもっとも新しい年号は、元文3年(1738)である。『後撰』自体が寛保3年(1743)に作成されていることをみても、ごく最近の京都について描写されていることが分かる。

このように、『名勝志』をもとに作成された『本撰』と比べ、『後撰』は幸安の生きた時代の京都、「現在の場所」としての京都が描出されているのである。幸安のなかで、

『本撰』では既存地誌をもとに「過去の場所」を描き、『後撰』で「現在の場所」を取りあげる、という区別があったと考えられる。

このような『後撰』の企画こそ、先に見た「聞る所を尊び、見るところをいやしむ」「凡情のならひ」を脱却した幸安の新たな視点が反映された部分として見ることができる。京都の「代表的地誌」である『名勝志』は「聞る所」を重視して作成されていた。幸安はそれに加えて自ら「見るところ」を『後撰』として、新たに加えたのである。

このような区分は、実は『山州撰』にも見られる。平安城部5末尾には、『山州撰』以後の予定が記されている。

予、この山州撰全部成就した後、また山州後集を撰し、洛陽洛外その餘山城一國の中の名を存する所、或は寺院などの惣じて当山州撰に載せざる百年前後より以来の新しく今専ら云う所々の事などを選ぶべし。

ここから、『山州撰』執筆段階で、早くも『山州後集』が企図されていたことが分かる。平安城部6末尾にも同様の内容が記されている。『山州後集』は、『山州撰』には載せなかった「百年前後より以来の新しく今専ら云う所々の事」に特化した内容を持つものであり、ここでも時間軸による場所認識を見て取ることができる。

V. おわりに

以上、『山州撰』と『皇州緒餘撰』の記載内容を主な資料として、京都時代および地誌作成時代の幸安の行動や地理的関心についての検討を行い、いくつかの知見を提出することができた。

まず、既存研究ではまったく解明されていない彼の京都居住時代の様相をかなりの程度まで明らかにできた。幸安は御所に入ったりしていた菓子司や香具屋、そして医者などを親戚に持つ家に生まれた。自分自身も叔父の営

んでいた香具屋を継いでおり、18世紀の京都町人のなかでも、文化的・社会的地位は比較的高い家に育ったと考えられる。ただし、幸安自身も述べるように、本格的な「学」を成すのは大坂に居住してからであり、地誌や地図に関する専門的な教育を受けていた形跡はない。あくまでも京都時代の幸安は「業」、すなわち商売にはげむ町人であった。

しかしながら、中井家に地図を閲覧に行くなど、高い知的好奇心は早くから抱いており、また名所地への旅行などによる地理的知識も獲得していた。20代半ばまでのそのような生活が、その後の「学」を求めた活動に少なからず影響していたのであり、なかでも幼少時代および香具屋時代の御所経験は、彼の京都認識、そして地誌作成に強く作用していたことが明らかとなった。

また、地誌作成時代については、作成された地誌書の関係やその作成動機、作成過程など、多くの点について理解を深めることができた。今回取りあげた『山州撰』と『皇州緒餘撰』はともに京都に関する地誌であるが、後で作られた『皇州緒餘撰』（とりわけ『本撰』）は前者の内容を進化させるため作成された可能性が高いことが明らかとなった。また、現存はしていないが、『摂津撰』や『大和撰』なども作成していたこともうかがえた。

『山州撰』といった京都地誌を作成するそもその契機となったのは、大坂居住後に改めて発見した「京都」について詳しく知りたい、という思いであった。居を移すことで、幸安は、「聞る所を尊び、見る所をいやしむ」という「凡情のならひ」から抜け出し、それ以前から持つ「過去の場所」としての京都へのまなざしと同時に、幸安の生きた「現在の場所」として京都をとらえることができるようになったのである。その成果がもっともよく現れているのが、『皇州緒餘後撰』である。また、『山州撰』執筆段階においても、同じような意識のもとで、『山州後撰』が企

画されていた。

このような「過去の場所」と「現在の場所」という二つの「京都」を見出したことを契機とする地誌作成であるが、最終的には、それまでに刊行されていた「代表的地誌」の系譜に連なるような地誌を作成するという点にまで目的が高められていた。そして、その具体的な内容には、既存地誌の「再撰」にとどまらず、幸安の経験やそれにもとづいた地理的知見が十分に加えられており、独自性のある地誌として高く評価できる仕上がりになっていることも明らかとなった。

以上のように、幸安の京都時代および地誌作成時代については、かなりの程度明らかにすることができた。その成果から判断する限り、幸安が「地図のオプション」⁴⁰⁾として地誌を作成していた形跡はまったく見出すことができなかった。むしろ、自らの移動経験のなかで獲得した「過去」と「現在」から場所をとらえるという独自のまなざしを携え、個別の場所を「文字」という媒体によって詳細かつ具体的に記していくという地誌作成者（トポグラファー）を志向していた、と評価すべきである。

このように、本稿の成果により、これまでの幸安像を大きく変えることができたのではないかと思う。しかし、地図史や地理思想史における幸安の役割や位置を正しく論じるためには、地誌作成時代に獲得したこのようなまなざしが次の地図作製時代における活動にどのような影響を与えているのか、という観点から、幸安および彼の地図を改めて検討する必要がある。課題としておきたい。

(京都大学総合博物館)

【付記】

図1掲載にあたり、独立行政法人国立公文書館に許可をいただいた。感謝申し上げます。本稿は2003年度に京都大学に提出した博士論文の第六章の一部を改稿したものである。また本稿

に関する口頭発表を2004年度人文地理学会大会において行った。

〔注〕

- 1) 柴田勲夫「森幸安とその著作図」(日本地図資料協会編『古地図研究』国際地学協会, 1978), 89~133頁。
- 2) ①喜田貞吉「三島地方古代」『喜田貞吉著作集』14, 平凡社, 1982, 145~159頁。1917年初出。②同「難波の京」(日本歴史地理学会編『摂津郷土史論』仁友社出版部, 1919), 436~480頁。③同「難波京とその前後」(大阪毎日新聞社編『大阪文化史』大阪毎日新聞社, 1925), 1~85頁。
- 3) 佐古慶三「浪華往古図」『古板大坂地図解説』だるまや書店, 1924, 7~9頁。同様の指摘は服部も行っている。服部昌之「浪華往古図と森幸安図」(新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻, 1988), 120~125頁。
- 4) 矢内 昭「豊臣末期の大坂を知るための若干の古地図森幸安図の評価と活用」(日本地図資料協会編『古地図研究』国際地学協会, 1978), 311~323頁。
- 5) 彼の作品を扱った研究として、たとえば次のような研究が挙げられる。①秋岡武次郎『日本地図史』河出書房, 1955。②同編『日本古地図集成』鹿島研究所出版会, 1971。③矢内 昭「大坂の上町の町割と町並」大阪府の歴史8, 1977, 2~22頁。④吉村 亨「中古京師内外地図の風景—近世の博雅が見た中世京都—」(足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社, 1994), 54~57頁。⑤川合英夫『黒潮遭遇と認知の歴史』京都大学出版会, 1997, 144~148頁。⑥拙稿「近世における浪速古図の作製と受容」史林85-2, 2002, 33~73頁。
- 6) 辻垣晃一・森 洋久編著『森幸安の描いた地図』国際日本文化研究センター, 2003, 348頁。
- 7) 前掲6) 10頁。
- 8) 地図作製時代について、別稿で若干の検討を行った。拙稿「森幸安の地誌と地図—京都歴史地図を題材にして—」(『平安京—京都の都市図・都市構造に関する比較統合研究とデジタルデータベースの構築』(平成14~16年度科学研究補助金研究成果報告書, 研究代表者: 金田章裕), 2005), 145~165頁。
- 9) たとえば矢守は、幸安を「ナゾのカルトグラフィアー」と呼んでいる。矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房, 1984, 316頁。
- 10) 前掲1), および前掲6)。
- 11) 「住友氏蔵」という蔵書印があり、本書が第15代住友吉左衛門からの寄贈であることが分かる。①垣口弥生子「大阪府立中之島図書館蔵第15代住友吉左衛門旧蔵書目(I)」, 大阪府立図書館紀要31, 1995, 29~61頁。②同「大阪府立中之島図書館蔵第15代住友吉左衛門旧蔵書目(2)」, 大阪府立図書館紀要34, 1998, 9~63頁。また、「中川」という蔵書印もあるが、これについては不明である。
- 12) 前掲1), および前掲6)。
- 13) 後に加筆を行った人物については不明である。
- 14) 前掲1), および前掲6)。
- 15) 前掲1) 90頁。
- 16) 前掲6) 27頁。
- 17) 以下の引用も、すべて書き下し文にしてある。
- 18) 『皇州緒餘撰』には菓子を商う『森村家記』が引用される。これは、明らかに兄弟(森村清七)が継いだ長濱屋の記録である。
- 19) 幼少時代のことであり、「御用」が村山家のものであったのか森村家のものであったのかを判断することは難しい。
- 20) 3つの記事は、それぞれ正徳3年(1713)に葵祭で御所車を見たこと(『美濃佐日記』の引用), 宝永7年(1710)に中御門帝の即位があり内裏に参り紫宸殿に行ったこと(『美濃佐覚書』の引用), そして毎年の節分における禁中の行事のこと(『美濃佐記』の引用), である。内容からみて、美濃佐とは、父親ないし祖父、伯父/叔父といった幸安に非常に近い人物だと推定できる。もしくは幸安本人の可能性もある。

- 21) 前掲6) 13頁。
- 22) 前掲6) 27頁。
- 23) 前掲6) 13頁。
- 24) この図の現存は確認されていないが、享保3年に作製されたとすれば、三河国八橋国への旅行と同年の作であることは興味深い。ただ、ここで示した北野天満宮の指図作製のように、地図作製期の幸安は、地図の識語に、以前に書いた自筆図の履歴を常に明示するような姿勢を見せている。この点をふまえると、やはり八橋への旅行などの際には、地図は作製されなかった、と見るべきである。
- 25) 前掲6) 12～15頁。
- 26) 京都時代に作製された図は一枚も現存が確認されていない。「地図」ではないと判断した幸安自身が、自ら処分した可能性もあるであろう。
- 27) 自分の生育地を離れることによって改めて「故郷」を発見するという経験は、本居宣長もしている。拙稿「青年期本居宣長における地理的知識の形成過程」、人文地理55-6, 2003, 18～39頁。
- 28) ①水江漣子「初期江戸の案内記」(西山松之助編『江戸町人の研究』第3巻, 吉川弘文館, 1974), 29～197頁。②同『江戸市中形成史の研究』弘文堂, 1977, 406頁。③同「近世初期の江戸名所」(西山松之助先生古稀記念会編『江戸の民衆と社会』吉川弘文館, 1985), 3～33頁。④鈴木章生『江戸の名所と都市文化』吉川弘文館, 2001, 276頁。
- 29) 拙稿「17世紀の名所案内記に見える大坂の名所観」、地理学評論77-9, 2004, 589～608頁。
- 30) 石川 謙「解説」(石川 謙編『日本教科書体系往来編』第9巻地理(1), 講談社, 1967), 56～57頁。
- 31) 『大和撰』については、名前から考えると『山州撰』と同じような構成をしていたと思われる。『大和撰』と『大和州地図記』は別物である。
- 32) 菅井聡子「江戸時代京都の名所案内記と遊歩空間—類型化と編纂史の分析を通して—」、地域と環境2, 1999, 29～39頁。
- 33) 室賀信夫「並河誠所の五畿内志について」下, 史林21-4, 1936, 133～145頁。
- 34) 前掲6) 17頁。
- 35) ただ、京都時代には『金吾記』のような日記ないし覚書を記すことはあっても、それを地誌の形態にすることはなかった。そのような行為が見られるのは、あくまでも京都への思いが高まった時期以降のことである点は注意したい。
- 36) なお、幸安作製の地図には『皇州緒餘撰』の巻数についていくつかの記事がある。たとえば、「皇城大内裏地図」(寛延3年(1750)作製:国立公文書館)には「皇州緒餘撰二百餘巻」と、また「中古京師内外地図」(寛延3年(1750)作製:国立公文書館蔵)には「皇州緒餘撰その本部百八巻, 続撰四二巻等」と、そして「京師内外地図第三紀伊都城南」(寛延3年(1750)作製:国立公文書館蔵)には「本部及び続撰後撰等の二百餘巻」とある。これらによれば、かなりの巻数が作成されていたことになる。
- 37) 表4では「代表的地誌」四書のほかに『京羽二重』と『京城勝覧』をとりあげていたが、この二書は『皇州緒餘撰』に引用されていなかった。そこで、多くの引用が見られた『拾芥抄』と『延喜式』を掲げた。
- 38) 幸安自身、「旧証を左に記すは、悉く武好〔『名勝志』の作者〕これを撰む分なり。また間々に通志を出す」(『山州撰』巻第二, 末尾)と記しており、『名勝志』中心の構成であることを明言している。
- 39) ただし、別の箇所(洛中部一「皇城」項)においては、「これを覚えず」と言っている。
- 40) 前掲6) 10頁。

MORI Kohan as a Topographer

UESUGI Kazuhiro

MORI Kohan (1701-?) is regarded as one of the most important cartographers in the Edo era. An analysis of previously unstudied resources by Kohan in conjunction with some of his other materials, however, provides new insights into him. This paper points out that he was a topographer before becoming a cartographer. After examining his topographical descriptions, I discussed aspects of his geographical thought.

He lived in Kyoto in his youth. He took over his uncle's incense business, and delivered the goods to the Palace as well as the houses of court nobles and warriors. His high cultural exchange with them through his business had a great influence on his later work and thoughts.

After quitting his job in 1729 he moved to Osaka. With the intention of providing the next contribution in the genealogical succession of typical Kyoto topographies, he began two works-the "Sansyu-Sen" and the "Kosyu-Syoyo-Sen" (each title means the selection of the topographical information about Kyoto). These works were greatly inspired by his nostalgic feeling towards Kyoto. An important part was also his flourishing regard of Kyoto as a city in the present as well as one in a historical context. Therefore, his texts were not made as accompaniments for maps, but weaved together from knowledge about 'past place' acquired from his reading of many other books, and one about 'present place' based on his own experience.

Key words: MORI Kohan, topographer, topography, Kyoto, Edo era